文・小原麻由美
絵・小島加奈子

ハピネスと金の糸

桂の木の葉が黄金色に輝き、森の小径が甘い香りに包まれています。萌黄色の三角帽をかぶった青い瞳の木の人形が、桂の木の洞に住んでいました。人形の名前は、ハピネスと言いました。

「あっ、また糸が切れちゃった」

ハピネスは短くなった糸を見つめてつぶやきました。糸車で木綿の糸を紡ぐのが人形たちの仕事でしたが、ハピネスは長い糸を作るのにとても時間がかかりました。

「みんなは早くて上手にできるのに、僕は……」

ハピネスは仲間の人形たちからも笑い者にされて、いつも寂しい思いをしていました。

ある日の朝、リスの親子が小径の隅っこで遊んでいました。リスのお母さんは、ハピネスの木綿の糸で生地を織り、下着や洋服を作っていました。

「あなたの糸で編むと、肌触りが優しくて滑らかな生地になるのよ」

リスのお母さんがうれしそうに話していたそのときです。空の高いところを旋回していたタカが、こちらへ向かって飛んできました。

「赤ちゃん、危ない！」

ハピネスはものすごい速さで糸車を押しのけて、りすの赤ちゃんの盾になりました。ハピネスの胸に、タカのくちばしが突き刺さりました。

「ハピネス、ありがとう」

リスのお母さんは赤ちゃんを抱っこして、急いで洞の中へ駆け込みました。

その日の夜、ハピネスは胸の痛みで目が覚めました。タカのくちばしが刺さったところから縦に長く亀裂が入っていたのです。

（僕、このまま割れて、死んじゃうのかな）

ハピネスが目を閉じようとしたとき、森の風が不思議な声を運んできました。

『きみを作った彫刻家のマシュウに、会いに行ってごらん。彼の仕事場は、小径のつきあたりにあるレンガ造りの家ですよ』

ハピネスは傷口を手で押さえて、森の小径を一歩一歩進んでいきました。

レンガ造りの家の前まで来ると、レンガをよじ登り、開いている小窓を探してやっとのことで中へ入ることができました。

「おやおや、小さなお客様。いらっしゃい」

黒いオーバーオールにターバンチェックのシャツを着て、茶ぶちの眼鏡をかけた初老の男性が窓辺に立っていました。

大きな机の上には、長い金づちが横たわっていました。深そうなつぼには、彫刻刀が何本も入っています。棚にはたくさんの本が並んでいました。

「僕を作った、マシュウ？」

ハピネスが問いかけると、マシュウはうなずきました。

「ここ、痛いよ……割れちゃうよ！」

ハピネスは、亀裂が入ったところを指さして泣きじゃくりました。

「それは、痛かったね。辛かったね」

マシュウはハピネスを抱きしめると、優しくほおずりしました。

「僕、傷だらけで、痛いところだらけなんだ！」

ハピネスは、ずっと糸車を回していて指が痛くなったり、慌てて走るとすぐに転んで足をけがしたり、仲間の人形たちに笑い者にされて、心も痛くてたまらないと訴えました。

マシュウは、ハピネスの顔を見つめました。

「でも今日は偉かったね。勇気を出してリスの赤ちゃんを守ったじゃないか！」

「えっ？　どうして知っているの？」

「そりゃ、私がきみを作ったんだから」

マシュウはハピネスの涙を拭いながら、ほほ笑みました。

「さぁ、こっちへおいで」

マシュウは、人形たちの三角帽を編むための糸を紡ぐ糸車の前にやってきました。

「一緒にやってみようか」

マシュウはハピネスを膝の上に置いて、糸車を回し始めました。カタカタ……音と共に細く長い糸が紡がれていきます。

「ゆっくりでいいんだよ。一人でやってごらん」

マシュウは、一所懸命に糸を紡ぐハピネスを後ろから支えました。

しばらくすると、マシュウの指先から金色の粉があふれてきました。金色の粉は糸に絡み合い、美しい金の糸ができあがりました。

マシュウはハピネスを机の上に横たわらせ、細かく切った金の糸にのりをつけて、胸の傷口に貼っていきました。

「何をしているの？」

ハピネスは、尋ねました。

「金継ぎと言ってね、傷ついたり割れたところを金でつなぐんだ。そうすると生まれ変わって、今よりもずっと強くなれるから」

マシュウは、ハピネスの指や足の傷口にも金の糸を貼り付けました。

「わぁ、すごい。キラキラしてる！」

ハピネスは、大喜び。

「もう大丈夫。日が昇ったら、おうちへお帰り」

マシュウはにっこり笑って、金継ぎしたハピネスの傷口にそっとキスをしました。

（おわり）

【文】小原麻由美
1969年、名古屋市生まれ。保育士を経て児童文学作家に。代表作に「ありがとうの道」（PHP研究所）、「キュンすけのおくりもの」（三恵社）がある。

【絵】小島加奈子
1969年、愛知県大府市生まれ。北海道由仁町在住。画家、イラストレーター。93年、愛知県立芸術大学大学院修了。北の自然と寄り添い暮らす。